

# 天地

ネットワーク テーブル 504号

天地シニアネットワーク 2020. 2. 13

T E N T I T O D A Y <川越散歩>			1
会員の広場			2
随 想	英会話の楽しみ(3)「英語を話すために必要な語彙数」	伊那 闊歩	2
論 考	中国人から見た日本人の言語表現心理(12) <客観的な描写・説明となる自発的表現>	兪彭年	6
随 想	160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人 <11>「優しくて親切でチャーミングな娘達」	臺 一郎	9
自 伝	三四朗自伝『サクソ奏者という生き方』(II)	藤本三四朗	11
回 顧	海外随想録(6) ザンビアでの思い出	森永 善彦	13
紹 介	「心と身体にいいものを」・日本緑茶センター 創業者・北島勇さんと海外茶(2) 「余白」	津田 孚人	15
講演会	「新三木会」「奈良興福寺文化講座」		17
事務局			18

\*\*\*\*\*

## T E N T I T O D A Y

\*\*\*\*\*

新型肺炎、高齢者は特に注意しなくてはならないようですが、先日開かれた高校時代の同期会、参加者はわずか12名でした。寒さもありましたが、人込みを避けた人が多かったようです。

予防には、手洗いが最有効と思いマスクをしますが、公衆トイレで、手を洗わない、こちらの方がマスクをしないよりずっと問題です。

\*\*\*\*\*

新型肺炎の日本の対応すっきりしません。テレビでの専門家の話では、民間の検査機関を使えば、検査はもっと大量に早くできるとのこと。現状では潜在的な感染者は多いとみられますので、検査が進めば感染者数が増えるのは自明の理。それでなくても観光客が減っている現在、汚染地域の指定を恐れて、対応が遅れているようにも見えるのですが・・・。

\*\*\*\*\*

今年になって初めて大学のバスケットの練習を見に行きました。すでに春休み(2カ月半)で海外への短期留学(1カ月)に行く選手もいる。聞くと、費用は、大学補助が10万円、自己負担が60万円、だそうで親も大変です。親の経済力で格差がつくようで気になります。

天地が始まって間もないころ、兪彭年さんが、<上海市の数百名の職員が夏休みで海外に行くが、技術や施設、システムなど世界で最新のものを訪ね

るという条件を付けている>、という話をしていたのを思い出します。中国は、短時日で世界第二の経済大国に躍り出ました。

\*\*\*\*\*

寒さが大分厳しい季節ですがお変わりありませんか。中国からの嫌な伝染病のニュースも有り、十分に気を付けましょう。

そんなことを言いながら、今年も元気で正月に「川越七福神めぐり」ウォーキングを兼ねての川越散歩でしたが、スタートも遅く最後の「布袋尊」では灯り頼りの厳しいウォーキングとなりましたが、無事に廻れました。ゴルフの球を飛ばしたからそこまで歩く・・・と同じで次の福の神が待っているからと思い歩くのも又楽しみでした。

<https://youtu.be/x0uJ9z1-RxU>

yaku5151 (小泉)

\*\*\*\*\*

## 会員の広場

\*\*\*\*\*

### 英会話の楽しみ (3)

伊那 闊歩

### 3. 英語を話すために必要な語彙数

1. 英語を話すためには、どれくらいの数の英単語を知っていれば良いか。この問題については、かなり古くから興味ある研究がなされている。最も有名なもののひとつが、英国ケンブリッジの研究者(？、polymath)- C.K. オグデン(1889-1957)の「ベーシック・イングリッシュ(Basic English)」ではなかろうか。かれは、人の社会生活上必要な情報の交換に欠くことのできない最低限の語を英語の語彙の中から 850 語選び出し体系化したのである(\*1)。

(\*1) 相沢佳子「英語を 850 語で使えるようにしよう」(文芸社)、

室勝、小高一夫「英語を書く本」(洋販出版)

これらの解説書によれば、ネイティブ・スピーカーでも日常会話において使っている単語数は決して多くはない。使われる頻度に従って、重要単語を厳選した結果、850 語もあれば十分であるという。では、実際に 850 語を使ってどんな表現ができるものか、上記「英語を書く本」から例文を引用させてもらって調べてみよう。たとえば、次の和文

**部屋をのぞいてみたが、中はまっ暗で何も見えなかった**

に対する英訳は

**I gave a look into the room, but all was dark inside,  
so that I was unable to see anything.**

となっている。ベーシック・イングリッシュ(以下ベーシックと略す)の単語表には、**look** は名詞として採用されており、動詞ではないのだ。それを動詞にするために **give a look into** だとか **take a look at** などと他のベーシックの単語と組み合わせる。ベーシックで採用されている動詞と助動詞の数は次の 18 語である：

**be, come, do, get, give, go, have, keep, let, make,  
put, say, see, seem, send, take may, will**

なんとこれだけで日常会話のためには、必要にして十分であるという。助動詞 **can** は表にないが **able** がはいつているので、かわりに **be able to** として使う。上記の例文でも **could not** ではなく **was unable to** としている(\*2)。

(\*2) 助動詞の shall や could, should, would, might など採用されていない。しかし、これらの助動詞はなにごとかの許可や依頼を丁寧につたえるときに必要な語でもあるから、ベーシックによる表現は情緒性にとぼしく事務的なものになると思われる。want は have a desire という。名詞に er, ing, unなどを付加して新しい単語を創り出すことができるので、語彙数はかなりふえるという。

ここで例文をもうひとつみてみよう：

**彼女は誰に対しても、わたしが彼女の命を救ったことさえも、  
恩義をうけてはいないと思っているらしい**

**She seems to take the view that she is not in debt to anybody,  
not even for what I have done to keep her from destruction.**

なにか非難がましい内容の文章だが、それはともかく、注目すべきはここに **destruction (破滅)** という難しい単語が使われていることだ。熟慮された上での採用であろうが、こういう単語を 850 語のなかに入れるというのは何か不自然さを感じる。さらに **destruction (破滅)** を採用しているものの、その反対語 **construction (建設)** が省かれているのだ。

ベーシックで採用している単語をすべて書き下すことはしないが、以上のように少ない例ではあるが、ベーシックによってかなり複雑な人情の機微なども表現できるのであろう。少ない単語で文章を書くのであるから、熟語や成句を多用することになり、文章が長くなる。しかし、それだけ具体的で明確な英文が作れるという。英作文の訓練にもかなり有効なのではなかろうか。ただし、医学論文などをベーシックで書くとすると、とうぜん医学に関する専門用語をベーシックに付け加えなければならない。経済学や自然科学、工学などについてもそれぞれの分野での専門用語が必要であることは言うまでもない。

**2.** 日本での英語教育においては、中学校では約 1250 語、高等学校では 1750 語、中高で習う語彙は合わせて約 3000 語だそうである。中学卒業時点で、ベーシックで使われる語彙数をはるかに超えている。英文法もひととおりに習っているのである。つまり、日本人は中学校を卒業した段階ですでに英語での高いコミュニケーション能力をもっていてしかるべきなのだ。さらに高校卒業するまでには 3000 語を習得する。これを縦横に使いこなせれば、日本人の日常英会話のレベルはかなり高くなっている筈なのだが、じつはそこからがたいへんなのだ。ほとんどの生徒たちは、英語を正しく聴き取って、余裕をもって話す訓練ができていない。大部分の生徒がめざすのは大学入試のための英語なので、**会話のための英語はむしろ邪魔なのだ(\*3)。**

(\*3) 最近、中学高校には英語の視聴覚室などもそなえられて、筆者の時代と比べれば飛躍的に効率のあがる会話訓練が可能である。しかし現実には注

目するほどの効果はあがっていないようだ。一部の進学校ではネイティブ教師の学校への派遣を断るそうである。入試のためには、ほかにやることがたくさんあり、会話などに時間をさいてはられないのだそうだ。会話を習得するためには、くりかえし訓練のための長い時間が必要であり、その間かなりの忍耐を強いられる。この訓練を経てこそ本物の英語を習得することができるのだが・・・。

また最近、現代英文学を研究し英語を自由に使いこなす女性と（日本語で）話す機会があった。彼女は日本の大学にいたのだが、このままでは絶対に英語を話せるようにはならないと、大学を退学し、単身米国の大学に入学しなおしたのだそうである。これが大当たり！以後 10 年間欧米の各国に滞在し、英語のほかにスペイン語もネイティブなみに話せるようになったとのことである。彼女には日本の大学をやめるという決断力があつた。留学するための資力もあつたのであるから、だれでもまねのできることはないが、米国での会話訓練にはなみなみならぬ忍耐と努力を要したことがうかがえる。本場に行けば自然にできるようになるなどと簡単なことではないのだ。

**3.** 昔は帰国子女というと、マスコミでも話題となりもてはやされていたが、ちかごろは珍しくなくなった。作家、エッセイストとして知られた米原万理氏（1950-2006）もそのひとりである。彼女はその圧倒的な語学力によってロシア語の同時通訳者になった。以下しばらく、彼女の著書「米原万理の『愛の法則』」（\*4）から引用させていただくが、そもそも帰国子女たちは、バイリンガルでもそのままでは同時通訳者にはなれないという。

帰国子女たちは、外国での日常会話には何の不自由もなく生活してきたとはいえ、かれらは平均して 700 語ほどの語彙をつかいまわして喋っているのだそうである。日常のコミュニケーションには「**語彙 700 語と五つの文型**」を知っていれば不自由しないのだそうだ（\*5）。しかしながら、語彙研究の第一人者ポール・ネイション（ニュージーランド・ヴィクトリア大学名誉教授）によれば英語を仕事でつかうなら 8,000 語から 10,000 語は最低必要だという（\*6）。仕事が同時通訳ならば、それこそ膨大な語彙量を必要とするので、ごく普通の帰国子女の知識量ではとても同時通訳はできないのだ。

（\*4）米原万理「米原万理の『愛の法則』」（集英社）

（\*5）ガブリエル・ワイナー「脳が認める外国語勉強法」（花塚恵訳、ダイヤモンド社）によれば、日常会話に必要な単語はわずか 604 語あれば良いという。

（\*6）三宅義和「対談 4、プロフェッショナルの英語術」（プレジデント社）の中で鳥飼玖美子氏が述べている。

**4.** 筆者（闊歩）が今座右に置いて毎日開いている本（\*7）のひとつには、英単語 1660 語によって作文された短い 150 の文例が掲載されており、ネイティブ・スピーカーの音読 CD がついている。これに使われた英単語は「大学英語教育学会」の選んだ「基本語リスト：新 JACET8000」（2016 年）の中の重要度上位 1660 語で、この中には、上記ベーシックで省かれていた助動詞はすべてはいつており、ベーシックで採用しなかった **construction（建設）** がはいり、**destruction（破滅）** は除かれている。この 1660 語は、現代英語の語彙の中核ともいえるものだそうだ。



この 1660 語は高校卒業までに一度は目にしたことのあるありふれた英単語である。本の著者(松澤喜好氏)は、この 1660 語を侮ってはいけない、その発音とアクセントの位置を完璧にマスターせよという。そのためには、本に収められている例文の音読を、くりかえし 100~200 回は聴け、というのだ。音読はネイティブが普通に喋る速度(\*8)で録音されているので、ついていくのがたいへんである。ひとにもよるが、10~20 回くらいでは、はっきり聞こえてこない。日本人の脳には日本語の音韻がこびりついているので、その隙間を見つけて英語の音韻を脳みそにしっかり植え付けなければならない。そのための訓練なのだ。

たとえば、**hat** ( [hæt], ふちのある帽子 ), **hot** ( [hɑt], あつい、ホットではない ), **hut** ( [hʌt], 小屋 ) の違いをはっきり聴きわけることができ、その違いを明確に発音できるだろうか。これらの単語に現れる母音をカタカナで書けばすべて「ア」である、つまり、日本語の「ア」に似てそうではないものが英語には少なくとも 3 種類あるということなのだ(\*9)。そんなこと神経質に注意しなくともいいではないか、どうせ日本人はネイティブなみの発音はできない、少々いい加減でも良いではないか、という態度で英語を教え、教えられてきたのが、これまでの日本での英語教育であった。そんな教育を受けた生徒たちこそ災難である。そんなおおざっぱなことでは、いつまでたっても英語が聞こえてこないのだ。

筆者(闊歩)は、これまで英語の発音訓練をほとんどしてこなかった。発音を軽視してまじめに練習してこなかったことがたいへん悔やまれる。このたび松澤喜好氏の「英語耳」の教えるとおりに毎日訓練しているが、嬉しいことに目の前に厚くたちこめていた濃い霧がすこしずつ晴れていくのが感じられ、歳のせいでも少々難聴がすすんでいるにもかかわらず、英会話クラスでもよく聴きとれるようになってきた。慣れてきただけなのかもしれないが、ただ漫然と慣れるのではなく、やはり語学は耳で正しく聴き取り、正しく発音することが基本中の基本であることを実感している。

#### (\*7) 松澤喜好「英語耳」(アスキー・メディアワークス)

松澤喜好、デイビッド・セイン「英語耳」(KADOKAWA)

(\*8) ネイティブ・スピーカーが喋るスピードは秒速 3~3.5 語、つまり、1 分間に 180~210 語程度だそうである。英語をこのスピードで聴けばかなり速く、とてもついていけないように感じるのではないかと思われる。しかし、くりかえし CD を聴いていけば慣れてくるものだ。

(\*9) **cat, cot, cut** の母音の発音も **æ, ɑ, ʌ** である。これらの例をみると子音には含まれたアルファベット文字 **a, o, u** の発音は **æ, ɑ, ʌ** に固定されているように思われるが、**pat, pot, put** の **put** や **mast, most, must** の **most** など単純な規則性によって統一できない。

5. 今年 2020 年 4 月から、公立小学校 5, 6 年生に英語を正式に教科として教えることになるらしい。3, 4 年生には英語を教科とはしないが、英語に慣れさせるためのプログラムが用意されるという。基本的に、英語は小学校の担任すべてが教えることとし、すでに 2018 年から準備してきたという。

ところが聞いてみるとため息が出るほど覚束ないのだ。準備というが、教師に対して年間十数時間の国内研修を実施しただけらしい。発音訓練だけで

もかなり長い時間が必要であるが、忙しい小学校教師にそれだけの時間と余裕などありはしない。

ところで、フィンランドは(人口 553 万人)北欧の貧困国のひとつであったが、戦後とくに国民の教育を重視し、教育制度と研究開発への多額の投資の結果、たった半世紀で、いまや科学技術で世界をリードするほどの富裕国へと変貌したのだ(\*10)。フィンランドの初等教育に携わる教員はたいへん優秀で社会的地位や待遇は大学教授よりも高く、全員大学院の学位をもっているという。かれらは、教授法についても大きな裁量が認められていて、日本のように何事も文科省のご機嫌をうかがう必要はないのだ。フィンランドの生徒たちの読解力、数学、科学リテラシー(その分野における知識、能力)などはつねに世界トップクラスにはいつている。さらに付け加えておけば、フィンランドの女性の政界進出は著しく、現在(2020年)首相は女性である。

フィンランドの教育事情に詳しいU先生によれば、フィンランドの若者の間では普通に英語が通じる、つまりかれらはフィンランド語と英語(さらにスウェーデン語)のトライリンガル(trilingual)なのだそうだ。それだけ英語が日常的になっているにもかかわらず、フィンランドの英語教員は最低1年間英語圏の国々への語学研修が奨励されるのだ。日本では、英語教員を1年間海外研修させるなどということは(そこまでやる気はないので)おそらく不可能であろう。それならば、教師へのもっとしっかりした国内研修制度をまじめに考えるべきである。

英語をはじめて習う小学生には、正しい英語の発音を教える。決して日本式の発音を教えるてはならない(\*11)。教科となると受験勉強と結びついて、すぐ難しいことを教えたがるが、英語嫌いにならないよう、難しいことは教えない。ひたすら正しい英語の音になれさせるべきなのである。

(\*10) ジャレド・ダイヤモンド「危機と人類」(日本経済新聞出版社)

(\*11) 立教大学名誉教授で同時通訳者としても有名な鳥飼玖美子氏は上記(\*6)のなかで述べているが、小学校3年生のときに、先生から「小学生のくせに、そんなキザな発音はするな」と日本式に直されたのだそうだ。今ではこんなことはないだろうことをひたすら願うのみである。

\*\*\*\*\*

## 中国人から見た日本人の言語表現心理 (12)

兪彭年

### 客観的な描写・説明となる自発的表現

動作・作用をする主体、動作・作用の及ぶ対象と動作・作用、この三つを用いて一つの表現に構成する。たとえば、「中国共産党は第十六回全国代表大会を開く」では「中国共産党」が動作・作用をする主体、「第十六回全国代表大会」が動作・作用の及ぶ対象、「開く」が動作・作用となる。

では、動作・作用をする対象を除いて、動作・作用の及ぶ対象と動作・作用の二つだけで表現を構成した場合はどうなるか。まず、先の文章で動作・作用をする主体を取ってしまった表現「第十六回全国代表大会を開く」はどうか。この表現を聞いた人は自然と「誰が開くのか」という問いを発する。つまり、動作・作用をする主体を聞いてくる。従って、動作・作用をする主

体を取ったことは欠陥となり、表現が不完全と言うことになる。

次、「第十六回全国代表大会が開かれる」ではどうか。これなら「誰が開くのか」という問いは出てこない。なぜ問いが出てこないのか。これは自発的表現で、ものごとが外力によるのではなく、自然に起こり、実現していくこととして表現しているからだ。自発であるため、外力となる動作・作用を起こす主体は必要でなくなる。

日本語では自発的表現が良く使われる。ものごとを話の主と関わりなく描写・説明するので、表現に主観性がなく客観的だ。従って、話の内容にも相手にも気を遣わずに済んで楽だ。この場合の動詞は自動詞が用いられる。その意味の自動詞がない場合には、その意味の他動詞に「れる・られる」が付いたのを用いる。他動詞に「れる・られる」が付くと、その他動詞は自動詞化されるからだ。

たとえば、「ドアが閉まる。」「席が空く。」「色が落ちる。」「事件が起きる。」「騒ぎが収まる。」「命令が下る。」「木が倒れる。」「人数が増える。」「人口が減る。」「学力が伸びる。」「話がまとまる。」「おもちゃが壊れる。」「バスが止まる。」「汗が流れる。」「血が出る。」「骨が折れる。」「日が傾く。」「火がつく。」「灯がともる。」「賃金が下がる。」「熱意が冷える。」「ベルが鳴る。」などなど、みな他動詞に対応した自動詞だ。

対応する自動詞がなくて助動詞「れる・られる」を付けて自動詞化した他動詞に、たとえば「歴史が繰り返される。」「個性が尊重される。」「万博が開催される。」「学校が新設される。」「アイデアが生かされる。」「理念が失われる。」「平和が脅かされる。」「苦勞が報いられる。」「進歩が見られる。」「リストラが行われる。」「陰謀があばかれる。」「伝統が受け継がれる。」「インフラ施設が破壊される。」「決議が採択される。」「結果が公表される。」「代表が選ばれる。」「文革世代が注目される。」「真意が問われる。」などなどがある。

用いる動詞が自動詞なのか他動詞なのかは辞書を引けばすぐわかる。日本の国語辞典は全ての動詞に自動詞か他動詞かの説明が付いていて、大変便利だ。だが、日本の国語辞典にもあたる中国の辞書、たとえば『現代漢語詞典』や『新華詞典』や『学生詞典』などにはそのような説明がついていない。従って、利用者が動詞の意味で自己判断するしかない。中国語の文法用語に他動詞に当たる「及物動詞」と自動詞に当たる「不及物動詞」があるのに、なぜに日本語のように説明しないのかはよくわからない。これは使い方次第で自動詞にも他動詞にも使えるから、説明を付けないのかもしれない。日本語の場合、自動詞と他動詞の形ははっきりと異なり、目で見ても耳で聞いてもすぐ区別が付く。

ところが、中国語の場合、自動詞の形と他動詞の形は同じなので、話の内容から自動詞なのか他動詞なのかを判断しなくてはならない。ここで中国語を日本語に訳すときに面倒が起きる。たとえば「今年秋天招開中国共産党第十六次全国代表大会。」の「招開」を自動詞に訳すか他動詞に訳すかを決めなければならない。この場合、動作・作用する主体が表現されていないので、自動詞に訳すのが適訳となり、訳文は「今年の秋に中国共産党第十六回全国代表大会が開かれます。」となる。

しかし、もしこの話が中国共産党の江沢民総書記の話だとどうなるか。こ

の場合は、「今年の秋に中国共産党第十六回全国代表大会を開きます。」にしても良いと思われる。ここでは動作・作用する主体が省略されているあるいは隠されていると理解してよいではないか。

「9月11日在美國紐約發生了恐怖襲擊事件。」の「發生」はどうか。やはり動作・作用する主体がでてこないのので、自動詞に訳するのがよく、訳文は「9月11日、アメリカのニューヨークでテロ襲撃事件（同時多発テロ）が起こった。」となる。「上海正在深入進行着国有企業的改革。」はどうだろう。ポイントは上海をどうとらえるかだ。動作・作用をする主体ととらえれば動詞「進行」は他動詞ととらえられ、動作・作用が行われる場所ととれば自動詞ととらえられる。従って、訳文は「上海（で）は今国有企業の改革を深く進めています。」と「上海ではいま国有企業の改革が深く進められています。」となる。

どちらにするか。もし、この話をしている人が上海の指導者だったら、自分がこの改革を進めているという意味で他動詞の文がよいのではないか。もし、話をしている人はただの普通の人間だったら、上海で起こっていることを説明するという意味で自動詞の文がよいと思われる。

「邦交正常化以来、中日両国加深了相互理解、建立了友好合作關係。」もやはりこの話の主の身分によって訳が違ってくるのではないか。主が政府の要人であれば、「国交正常化以来、中日両国は相互理解を深め、友好協力関係を築いてきました。」となり、ただの普通の人間であれば、「国交正常化以来、中日両国では相互理解が深まり、友好協力関係が築かれてきました。」となる。もちろん、この普通の人間が國の主人公意識で話をしているとすれば、政府の要人の場合と同じになり、他動詞の文がよいだろう。従って、他動詞か自動詞化は話の内容だけでなく、その話をする主が内容とどのようなかわりを持つかをも考慮して決めなければならなくなる。この点、中国語は日本語よりずっと流動的で複雑だ。

自発的表現の特徴として、自然に起こり実現するものごとは格助動詞「が」によって示される。ただ対比して強調する場合と否定する場合は提示助詞「は」で示される。たとえば、「中国では改革・開放によっていま個人主義は見直されているが、利己主義はやはり批判される。」「儒学は否定されて、いないばかりか、いまマルクス主義との融合が図られている。」「中国では以前、個性は否定されがちでしたが、いまは尊重されるようになりました。」

「中国現在出現了中産階層、他們的收入在快速提高。」の訳文は「中国ではいま中流階層が現れ、彼等の収入は急速に伸びています。」となる。「不許侵略歷史重演、侵略歷史不会重演。」では「侵略の歴史が繰り返されることを許さず、侵略の歴史は繰り返されない。」となる。「中国是抑止消費、現在是鼓励消費。」は「中国では昔消費は抑制されましたが、いま消費は奨励されています。」と訳される。中国語には「は」や「が」にあたる品詞がないから、日本語に訳すときには注意が必要だ。

実際、中国語も自発的表現がよく使われている。ただ日本語のようにきちんと形に表れてこないためやっかいだ。中国の駆け出しの日本語通訳は中国語の自発的表現を日本語の自発的表現に訳するのがあまり上手でない。原因は、ひとつは中国語の動詞をよく他動詞に取りがちで、もう一つは訳す内容と話



の主の関わり合いを無視しがちだと思われる。  
たとえば、ある普通の市民が上海市の現状を説明して、自発的表現の「いま内需がいっそう拡大されています。」の「**現在在進一步扩大内需。**」と言った場合、通訳が「**扩大**」を他動詞にとって「いま内需をいっそう拡大しています。」と訳したら、この市民が内需を拡大しているとも受け取れて、身分不相応の話をしているという感じが生じないだろうか。このような過ちはふだんから注意して克服すべきであって、通訳をする際に注意しようとしても、そのような余裕はあり得ない。

だから、日本語の通訳だからといって日本語だけを研鑽すればよいというわけにはいかない。やはり中国語の研鑽を積まないと、立派な通訳にはなれない。わたしのこのような認識はこれまでの仕事の中で得たもので、仕事から得た体験とも言える。

日本の客人が上海市の要人を表敬訪問したり、会談をしたりする際、わたしはよく同席して中日双方の通訳の訳を聞きながら問題点をチェックしたり、まずいと思った訳の原因を考えたりした。

誤りの原因は日本語に関係するものもあれば、中国語に関係するものもあった。通訳という仕事を立派にやり遂げるのは並大抵ではないと、つくづく感じた。

\*\*\*\*\*

## 160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人（11）

臺 一郎

### 優しくて親切でチャーミングな娘達

19世紀後半の欧米からの旅行者にとって、とりわけ男性の旅行者にとって、日本の若い女性は大変魅力的に映ったようだ。

幕末に日本を訪れたプロシヤ国のオイレンブルグ使節団は訪日記録に、彼等が江戸郊外の王子を訪問した際に植木屋に立ち寄り、そこでお茶の接待を受けたときに出会った女性について印象を記している。彼等にお茶を出したのはその家の娘だったが、彼女について団員のベルクは「稀にみる品格と愛嬌のある女性で、われわれが来た時は質素な普段着で園芸の仕事をしていた。我々が入っていくと、仕事をやめてお茶を出してくれたが、控えめでしかも親切な物腰に我々一行はみな魅せられてしまった」と書いた。また使節団の団長のオイレンブルクも彼女について「この若い娘は私たちが話しかけるといつも愛らしく顔を赤らめるのであったが、彼女に対して、わたしたち一行の若い人々がたちまち心を奪われた」と述懐している。

また幕末 1867年に江戸を訪れたフランス人のボーヴォワールは、日本の若い女性の外見を次のように紹介している。「(日本の)女性は大変魅力的である。その漆黒の髪は飾りのついた三つの束に手際よくまとめられている。彼女たちはにこやかで小意気、陽気で桜色、おしろいは少々濃いめだが、これは特に紅を刷くか、唇を金色に染めたい気分になる時とかいうのが本当のところだ。うち掛で暖かそうに身を包み、時々前を合わせながら、小さな下駄で小刻みに歩く。緑か緋の厚地の織物の帯では、1ピエ四方の大きな結び目があり、弾薬入れの格好で背中に乗っているが、それが彼女たちをちょっとキビ

キビした様子に見せて、なかなか好ましい」と。

さらにオーストリーの外交官ヒューブナーは著書『オーストリア外交官の明治維新』の中で、日本の若い女性に関して「彼女達は陽気で純朴にして淑やか、生まれつき気品にあふれている。しかも彼女らは極めて人懐っこい」と称賛した。

明治初頭にフランスの実業家エミール・ギメとともに来日した画家のフェリックス・レガメは、弟フレデリックに出した手紙の中で、日本で泊まった旅館の女中さんについて、「そして旅館では、客におじぎをし、鳥の囀りのような歓迎の言葉で迎える可愛い女中さん達がいる。玄関に入って靴を脱ぎ、最後の靴下まで脱ぐと、女中さん達が足を洗ってくれる。その娘たちが軽い布製のだぶだぶした羽織るものの袖に腕を通すのを手伝ってくれる。(途中略) 食事中に娘たちは給仕を中止して(うちわ)で扇いでくれる。まさに彼女達にやってもらおう至上のことだ」と感激して記述しており、彼の嬉しさが伝わってくる。

そうかと思えば、華族女学校(後の女子学習院)で英語を教えた米国人アリス・ベーコンは、「日本人の中で長年暮らした外国人は、美の基準が気づかぬうちに変わってしまい、小さくて穏やかで控え目で優美な日本女性の中に置くと、自分の同胞の女性が優美さに欠け、荒々しく攻撃的でぶざまに見えるようになる」と指摘している。

明治30年代に日本を訪れた英国人写真家のハーバート・ボンディングズは、その手記『英国人写真家の見た日本』の中で、取材のために訪れた愛媛県松山市のロシア人捕虜のための病院における日本人看護婦の素晴らしさを「その優しい心遣い、病院の中を妖精のように素早く動き回る優雅な動作、病人の希望にすぐ応じられるような絶え間ない心配り、疲れを知らぬ気力と献身、その忍耐と熱意、患者に対する丁寧な態度、包帯を洗って交換する優しい介抱ぶり、こういったものすべてが、日本の婦人は世界のどこの婦人たちにも負けない女性としての最高の美德に溢れていることを示している」と絶賛した。

ところで欧米人の日本女性に対する高い評価は、何も可愛くて優しい気立てとか、外見についてだけではなく、教養や知識の高さにも及んだ。米国海軍の提督マシュー・ペリーは、遠征記の中で「日本の婦人は中国の婦人と異なっていて、男と同じく知識が進歩しているし、女性独特の芸事にも熟達しているばかりでなく、日本固有の文学に通じていることもしばしばである」と識字率や記述力の高さにも感心している。

19世紀半ば頃の世界では、アジア各国はもちろん、欧米においてさえも女性の識字率は男性に比べて総じて低く、庶民階級の女性ともなれば「字は読めない、書けない」人が多数であったようだ。ところが極東の果てに位置する日本国を訪れたら、地方の宿屋の仲居さんや女中さん達までもが、同性の友達同士で手紙のやり取りをしているのを観て、大いに驚き感心したのであ

る。

## ご参考

「160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人」も本稿で11個目になる。これらの原稿は筆者の著書「今も昔もいたるところいい人の国日本」（2016年、東方通信社）からの抜粋原稿に若干加筆したものです。ご興味のあるかたは、上記タイトルで紀伊國屋書店のネットサイトやアマゾン、楽天ブックスなどで検索し取り寄せが可能です。

\*\*\*\*\*

## 三四朗自伝『サクソ奏者という生き方』（Ⅱ）

藤本三四朗

「その頃は、ほんとに何を信じていいのかわからなかった」

前は、「信じられるものは音楽だけだ」という話をしましたが、その頃は、ほんとうに何を信じていいのかわからなかったのです。

今は信じられるものがたくさんあります。一番信じられるというか、信じたいものは愛という心。でも、そこに至るまでに長い長い道のりが待っていました。

皆さんは1975年から78年あたりの日本の音楽シーンや海外の音楽シーンを覚えていらっしゃるでしょうか？

日本では、基本的に歌謡曲と演歌が全盛の時代で大変な人気を呼んでいて、例えば松田聖子をはじめとするアイドルがたくさんいました。ニューミュージックというのも結構盛んで、ユーミン（松任谷由実）とか、ビリーバンバンとかハッピーエンドとか。その他にも、沢田研二と一緒にやっていた井上堯之バンドなどがテレビにちょろっと出てきて、そんな時僕は本当にワクワクしていました。

1972年から79年にかけてTBSテレビの生番組で「ぎんざNOW」というのがあって、それにキャロルが出てきた時は僕も感動しました。最近キャロルのメンバーだったジョニー大倉さんの息子さんでケニー大倉というシンガーの方とご一緒することがあるのですが、テレビでキャロルを観ていたあの頃、そんなことが将来あるなんて全く想像もできませんでした。

70年代の音楽番組は基本的には歌謡曲とアイドルみたいなものばかりだったので、僕はそれを見ているのが本当に苦痛でした。だから、「日本で音楽家になるというのはすごく難しいな」と感じて、お先真っ暗という気持ちでした。まさに思春期だったのです。

当時は既に大学受験が当たり前という時代になっていましたから、僕に対しても大学に行きなさいという話は当然ありました。僕はとてもじゃないが大学に行ける学力ではないという状況だったのですが、一応本屋さんに行って大学案内をパラパラめくっておりました。そこに留学のコーナーがあって、音楽大学の中にボストンのバークリー音楽院というのがありま

した。たった4行の小さな紹介でしたが、渡辺貞夫や秋吉敏子のことが書いてありました。ラジオの東京FMに、その頃はFM東京だったと思いますが、My dear lifeという番組があってよく聴いていましたので、渡辺貞夫の名前は知っておりました。

家族に、米国のバークリーという大学に行きたいと言うのが中々難しかったです。ですが、母親は音楽に関してちょっとした情報がありましたので、海外の音楽大学に行きたいという僕の希望を割りとは好意的に受け取ってくれたのです。

僕がバークリーのことを家族に相談した頃、僕は今で言ううつ状態。精神的に相当よろしくない状況でした。両親も心配して、「三四郎のどうしても海外の音楽大学に行きたいという願望をもし否定したら、あの子は自暴自棄になって何をするかわからない。無茶をする子だから。だったら米国の大学に行かせるのもいいのではないか」という風に風向きがぐっと変わってきました。

とりあえず3月に高校を卒業し、バークリーは9月から始まるので、入学願書、入学許可証、渡航許可証等々の書類をもらい、ビザを取り、そしてアメリカに行くという段取りが見えてきたわけです。

僕の真っ暗な思春期からいきなり真っ青な青い空が広がってきて、その頃アメリカで「カリフォルニアの青い空」という曲が流行っていたのですが、まさにそんな感じで急に世界が広がっていきました。

でも、そうなればなったで「これはいかん、音楽は好きだけれど基礎的な事をちゃんとやってきたわけではないので、なんとかしなきゃ」となったわけです。向こうに行って試験に落ちたらもう目も当てられないと。

そこで、クラシックの先生であるとかジャズの先輩であるとか、ともかくいろんな先生や専門家に手当たり次第にレッスンを受けました。英語の勉強も一段とやりました。英語だけは高校時代の3年間もずっと一生懸命やってきましたので、さらに英会話に磨きをかけようと。

英語の勉強と音楽の勉強。それまでのあのジクジクした感じとはうってかわって一生懸命に自分の目標に向かって生きる、という方向に変わっていったのです。

\*\*\*\*\*

## 海外随想録（6）

森永善彦

### 海外の思い出—ザンビアでの思い出

私のトヨタ自動車での海外部門に所属していた時の経験を、何回かに亘ってお話ししています。先回はウガンダの首都カンパラでの少々変わった夕食の話を書きました。その後ウガンダからケニアのナイロビに戻り、タンザニアの首都ダルエスサラームを1泊の行程で訪れ、またナイロビに戻り、ナイロビから空



路ザンビアの首都ルサカに行きました。その時、中々日本人が短期間の出張では経験出来ない出来事を体験しました。そのお話をします。

繰り返しますが入社後 4 年半弱冠 28 歳の時の思い出です。その当時のザンビアでのトヨタの販売はまだ小規模なものだったので、販売網は他の国と違ってイレギュラーで、国全体をカバーする代理店は名前だけで実質的には有りませんでした。実際にはその傘下のディーラーに直接車両や補給部品を日本から供給して販売して貰っていました。従って業務はそれらのディーラーと直接することになります。

先ず首都ルサカに 1 つディーラーが有り、そこを訪問し車の補給部品供給について話をしました。次にルサカから北北西 400 キロメートル離れたルアンシャ（町若しくは村程度の規模）のディーラーに行く事になっていました。

朝ルサカの空港で、ザンビア北のルアンシャの近くの大きな都市ウンドラ行きの搭乗手続きをしようとする、予約した飛行機便が満席で搭乗出来ないと言われました。これは困ったと思っていると、ルサカのディーラーの部品部長のクロスリー氏が、それなら自分の車を貸すから車でまずホテルのあるウンドラまで行けばよいと言われました。

彼曰くウンドラまでの道は約 400 キロ、非常に簡単で、真直ぐな 1 本道の国道であり、300 キロ位行くと 2 股に分かれているので左に曲がればウンドラに着くとの事でした。但し注意事項は運転中、道端を歩いている現地人が結構いて手を挙げて乗せろと言うが、大変危険な目に会うかもしれないので、絶対乗せてはいけないとの事でした。ガソリンは満タンにしておくので途中給油の必要はないと言われました。

今考えると初めての国で地理も良く分からないのに 400 キロを一人で車を運転するなど良くやった物と思いますが、その時は現地に住んでいる人のアドバイスなのでマー大丈夫と思って余り不安も感じずに運転する事にしました。彼の車はトヨタ車ではなくフィアットの小型の中古車でした。

飛行機で行く予定だったその日の午後、クロスリー氏が街はずれまで送ってくれ、紙袋にコーク 1 本とサンドイッチを入れて渡してくれたのでそれを後部座席に積み、そこから多少の不安と共に国道を北に向かって出発しました。

ザンビアは宗主国が英国だったので、左側通行で右ハンドルの車であり、違和感なく運転出来ました。表面は粗いが、コンクリートでまずまずしっかり舗装された国道は言われた通り 1 本道で、道の両側には殆ど家屋もなくただっ広いサバンナが広がっていました。ただし道に沿って土を盛り上げた出来た三角錐の小山の様な物が数多く有りました。高さは 2-4 メートルでした。

はじめは何だろうと思いましたが、これが本で写真を見た事の有る蟻塚だと暫くして気付きました。勿論それまでに本物の蟻塚など見たことは無かったので、非常に印象的で異国の地にいることを実感しました。

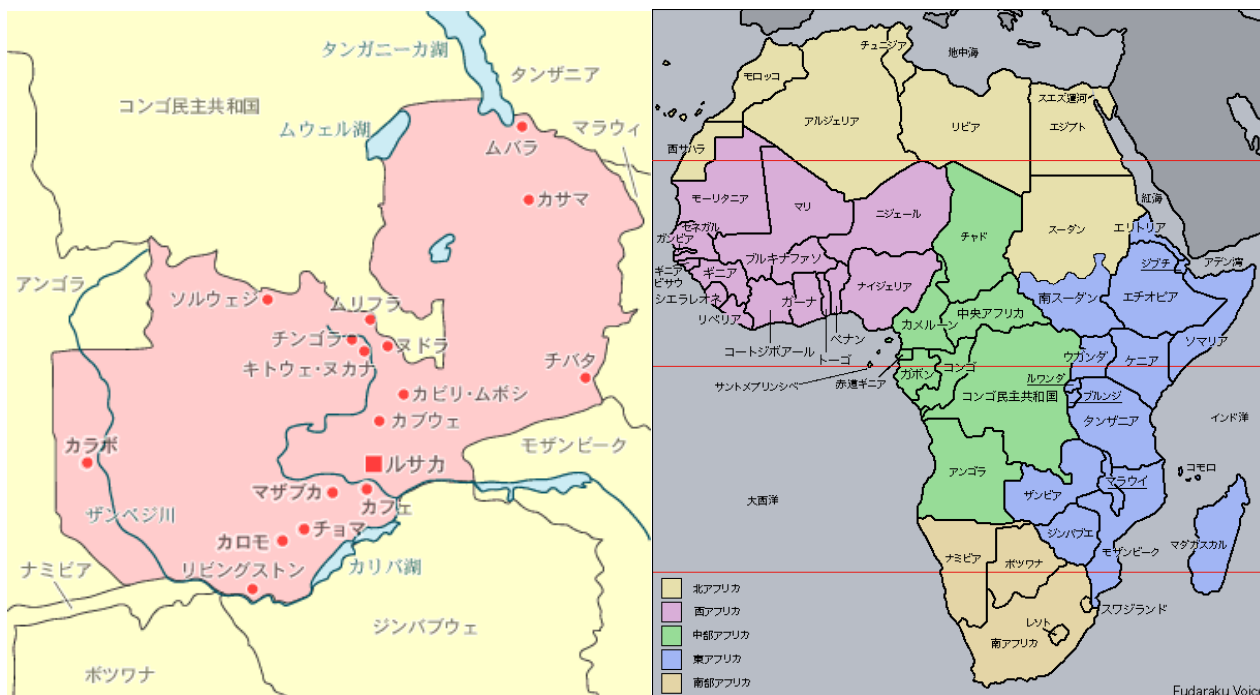
兎も角クロスリー氏に教えられた通り国道をノンストップで、平均時速 80-90 キロでひたすら走り、300 キロを過ぎた頃道が大きく 2 つに分かれている所に来ました。これがクロスリー氏の言っていた分かれ道だと思い、標識にも左はウンドラと記されていたので左折し、更に 100 キロ近く走ると鉾山の街ウンドラに着きました。

すでに日が暮れて薄暗い中、車を止めて何人かにホテルまでの道を尋ね、何とか予約されたホテルを見つけそこで宿泊しました。夕食は1人で外に出てホテルの近くで中華料理店を見つけ、食事をしました。アフリカ大陸のど真ん中の中華料理店で、非常に変わった体験をしましたが詳細は割愛します。

次の日は目的のルアンシャと言う街に有るトヨタのディーラーを尋ね、仕事を終え、ガソリンを満タンにしてもらいまた400キロを運転してルサカに無事戻りました。ルサカは首都としては小規模ですが、小さいとは言ってもそれなりに多くの建物が建っていて道も多くあり、一度しか通っていないのでクロスリー家が何処かハッキリしませんでした。が、記憶を辿りつつ運転していると彼の家に何とか辿り着きました。この体験をレポートにして手紙で日本の職場に送りました。まだFaxもない頃で勿論e-mailなどはなくホテルの薄暗いランプの元で便箋にディーラー訪問レポートを書き、日本の所属部署に郵送しました。

その後マラウイを經由して南アのヨハネスブルグに着き、南アの代理店を訪問していたら、日本の上司から電話が掛かって来て、ザンビアの件で「知らない国を1人で長距離を運転するとは何という無謀な事をするのだ。今後このような危険な事をしては絶対駄目だ」と叱られました。本人は使命感に燃えて、アフリカのサバンナを単独で走破し、ディーラー訪問で与えられた業務をこなしたと自負していたので怒られるとは、意外に思ったものでした。

しかし歳取って部下を持つようになると、確かに私のした事は無鉄砲だったな一とその時の上司の気持ち理解出来ました。 以上



「心と身体にいいものを」

・日本緑茶センター創業者・北島勇さんと海外茶（2）

（津田孚人）

＜日本緑茶センター（株）創立50周年記念誌より＞

ソニープラザストアへの納入

1970年のある日、あのSONYから電話がありお伺いすることになりました。創業当初、ポンパドールからは、カモミール、ペパーミント、ローズヒップ、ハイビスカスの4種類を輸入して5ティーバッグ入りを80円で販売していました。

その当時、ソニー製品は世界で大変人気で輸出が盛んでしたが、その代わりにアメリカとの貿易均衡を図るべく日本に輸入製品を販売する店を計画していました。取り扱う商品として最初に選ばれたのが「ポンパドール・ハーブティ」でした。

そして輸入雑貨専門店・ソニープラザストア（現プラザ）第一号が銀座にオープンしましたが、当初食品は「ポンパドール」のみで、他は雑貨商品のみでした。

それ以降、高級スーパー・ユアーズやナショナル麻布スーパーマーケット、シェルガーデンとの取引も始まることになり、以降、皆様の身近な店舗でもお手に取りやすくなるように「フラワーティー（ハーブティー）」をひたむきに辛抱強く日本中に広めるべく努力を続けました。

さらに大型店へ

1971年2月に「日本緑茶振興センター株式会社」を設立、その年に新宿にオープンした日本初の超高層ホテル＜京王プラザホテル＞のメニューに世界のお茶としてポンパドールの「フラワーティー（ハーブティー）」が採用されました。

1972年には山之内製菓からスイスハーブを使用した「ハーブキャンディ」が発売され、以後ハーブ商品はティー以外の分野にも広がることになりました。

さらなる事業拡大を図るべく1973年1月に本社を渋谷区代々木に移転、この年に新しい渋谷の街の象徴、「渋谷 PARCO」がオープン、パート1、2階のカフェテラス「a.i.u.e.o」のメニューでは、早速ポンパドールの「フラワーティ（ハーブティー）」が採用されました。また、津村順天堂（現ツムラ）から、1975年に入浴剤・くすり湯「バスハーブ」が誕生。ハーブ商品が食品分野以外にも広がっていく大きな転機になりました。

1976年に発売された桑井いね氏の著作、「おばあちゃんの知恵袋」（文化出版局）で、“家伝の秘薬”としてポンパドールの「フラワーティー（ハーブティー）」が紹介されました。

## フラワーティーからハーブティーへ

創業10年目にあたる1979年に、日本橋高島屋から当社商品を中心とした「ハーブフェア」開催の依頼をいただきました。フェアには、ストローベリーファームの「ハイビスカスのシャーベット」、三笠園芸の「ハーブの種」香辛野菜として市場に出始めたばかりのサンファームの生ハーブも出店、ハーブは以後、ドライハーブのほかに生鮮品としての販路を広げていくこととなります。このフェアは当初1週間の開催予定でしたが、反響が大きかったために延長されました。

このフェアが契機となって、マスメディアはようやく、フラワーティーとして紹介していたハーブを「ハーブティー」の名を冠して載せはじめ、この年に、文化出版局より「ハーブの本～育て方と使い方」が出版されたことは、その記念と言えるでしょう。

また、この年、当時ではアジアで最も高い超高層ビルだった「池袋サンシャインシティー文化ビル」に在日ドイツ商工会議所ショールームがオープン、ポンパドール・ハーブテイのコーナーを設けていただき、まさに本格的なハーブの時代が始まりました。

\*\*\*\*\*

## 「余 白」 <水道水> (津田)

北島さんを知ってハーブティーを知りましたが、それ以上に、コーヒー、紅茶ですら、由来など殆ど関心がありませんでした。やや負け惜しみの感じがしますが、振り返ってみると、我々は、戦前、戦後と井戸水、天然水をもっぱら飲料として育った世代なので、コーヒー、紅茶などを縁遠く感じていたのかもしれない。

その後、水道水に変わりますが、水がどんどん不味くなった結果、コーヒーや紅茶に走るようになったということでしょうか。都内の水道水は、カルキの匂いがしてとても飲めない、いつもシロップを入れる、と話していた先輩を思い出します。

戦後しばらくまで、家庭には井戸があり、共同使用という家庭も多かったと思います。煮沸して使用する家庭もあったかもしれませんが、一般の家庭は、井戸水をそのまま飲んでいました。夏は冷たく、冬は温かい、素晴らしい水でした。

以前に住んでいた武蔵野市の水は最高でした。江戸時代、江戸市民の「水がめ」だった井の頭自然公園が市内にありましたが、家康は、井の頭の水でお茶を飲んでいたといわれています。

その後、公営水道に変わっても、地下水の分量が多いので、美味しさ、新鮮さはあまり変わりませんでした。その後人口が増え、地下水の汲み上げに規制がかかり、浄水場経由の河川の水がブレンドされるようになったために、水質が落ちていましたが、それでも都内のカルキの匂いが強い水道水に比べれば、武蔵野の水はずっと上でした。

転勤で、酒処の広島、神戸に住み水自慢の水道水を飲みましたが、あの武



蔵野のような、夏は冷たく、冬は暖かいというような水道水には出会いませんでした。

以上のごとく、井戸水、良き水道水で育ってきたために、嗜好飲料との出会いが遅れ、馴染みが薄かった。さらに水道水が不味くなり、煮沸して飲まざるを得ず、ためにコーヒーや紅茶の色・香・甘味を加えざるを得なくなった、というのは言いすぎでしょうか。

高校時代まで、飲み物は「日本茶」か「麦茶」。大学生の頃になると「インスタントコーヒー」が出てきましたが、自動販売機も少なく、「缶コーヒー」「バヤリースオレンジ」「トマトジュース」などを酒店などで買って暑さをしのぎノドを潤していたように思います。

\*\*\*\*\*

## 文化講座・講演会

\*\*\*\*\*

### 第115回 新三木会 講演会のご案内

1. 日時：2月20日（木）13時～15時  
於：如水会館・2F スターホール
2. 演題：『日本政治の展望—どこへ向かう安倍政権—』
3. 講師：芹川 洋一 氏 日本経済新聞論説フェロー・元同社論説委員長
4. 申込：Eメール・[shinsanmokukai@gmail.com](mailto:shinsanmokukai@gmail.com) 電話・070-6994-0137  
フルネーム・卒年・所属（紹介者）  
（紹介者）天地シニアネットワークで申し込んでください
5. 会費（受付にて） 2千円、 婦人千円、学生無料、
6. ホームページ <http://jfn.josuikai.net/ircle/shinsanmokukai/>

### <今後の予定>

- 第116回 3月19日（木）13：00－15：00、 2F スターホール  
15：15－16：20）茶話会 3F 桜の間（自由参加）  
『平成経済の教訓と令和経済の課題』 小峰 隆夫 氏  
大正大学教授 元国土交通省国土計画局長  
元経済企画庁経済研究所長

\*\*\*\*\*

### 奈良興寺文化講座 2月20日（木曜日）

- 午後5時半～6時半：第一講  
「学問を生きる—慈恩会の堅義」 興福寺録事補 ザイレ暁映  
午後6時40分～7時・・・心を静める  
午後7時～8時：第二講  
連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺寺務老院 多川俊映  
会場：（学）文化学園 文化服装学院内  
受講料：500円 先着200名  
（JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分）

\*\*\*\*\*

## 事務局

\*\*\*\*\*

<投稿>を歓迎します。

<プリント版・郵送>

メール版を編集してプリント版を月に1回発行し郵送しています。

お申込み頂ければお送りします。一応、実費として月@350円(4200円/年)をいただいておりますが、強制するものではありません。

<振込先>三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532  
(口座名) テンチシニアネットワーク

---

天地シニアネットワーク・テーブル・504号

発行：2020年2月13日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：[tentisenior06@gmail.com](mailto:tentisenior06@gmail.com)

電話・FAX・03-3819-7651